

財団だより

多摩川

1979. 6. 第2号



夏の川原に咲くオオイヌタデ



多摩川上流御岳付近で水遊びする子供達

■ 川のはなし ■

② 川と日本人

川——それは日本人にとって、かけがえのない大地だった。日本地図をひろげて見ればわかるように、日本列島の自然は急峻な山々がその大部分を占め、人間が住み、利用できる土地は河口周辺のごくわずかな平地でしかない。そしてその平地とは沖積地、つまり川の水が運んできた土砂が堆積してできたところであり、肥沃で水資源に富んではいるがしかし洪水の通りみち、いわば河川敷そのものである。とすれば、つねに動いているその川とどうつきあうかによっていっさいの土地利用——水利用も上流の山の扱いも決定される。それゆえにこそ川とどうつきあうかが、いつの時代にも最大の課題だったのである。

人工の施設を用いて水を利用するという、人類に文明の道を開いた灌漑水利の技術が川とのたたかいはぐくまれたように、日本人の自然とのたたかひの歴史もまた、川とのたた

かひの歴史だった。日本の農業が水稲を中心にして発展してきたのもそこに豊かな水資源が約束されていたからであり、またそれが山間部からやがて大河川周辺の平地へとひろがっていったのも、治水と干拓の事業がすすむにつれてのことであった。

川とつねに対峙してきた日本人にとって、自然の恵みとは川が運んでくれる水と土壌の恵みにほかならず、自然の脅威とは水害をおいて他にはなかった。もとより早ばつがなかったわけではない。しかしそれは今日の水問題とは質的に異なるものであり、「日照りに不作なし」ともいわれたように、早ばつは地震と同じ不運な天災に過ぎなかった。日本人に真に恐れられていたのは水害の方であり、今日のように地域的需給のバランスを崩した恒常的な水不足の問題が発生するのは、東京の人口が急激に膨張する日露戦争後のことである。(後略) (『水と緑と土』1974. 富山和子・中谷新書より)

多摩川散歩



若アユの碑

多摩川のアユ漁も6月1日から一部解禁される。今年の稚アユの放流は多摩川全体で約150万匹に達し、100万人もの釣り人が、多摩川の上流や秋川などで糸をたれると予想される。

多摩川のアユは、江戸時代將軍家に献上され、天下にその名を広めたほど味が良かったといわれている。東京湾からさか登ってきたアユが今頃の季節になると、川の中に入れた足にぶつかるほど多かったと言われ、又、若アユ独特のスイカのような芳香が川一面に漂い、近在の人々は、この香りでアユ漁の準備をしたと伝えられている。海から川にはいった小アユは、多摩川の清流の藻類を食べて大きくなる。この川底の玉砂利につく藻がアユの味を左右するらしいから、多摩川の藻がそれだけアユにとって良かったのかもしれない。そのため大正時代に入ると乱獲がたたって天然アユが少なくなってきた。いや、乱獲だけではない。多摩川の中流や下流部に設けられた取水堰によって登れなくなった事、それに下流部の工場建設や住宅の増加で、水が汚れ始めた事などが直接の原因かもしれない。そ

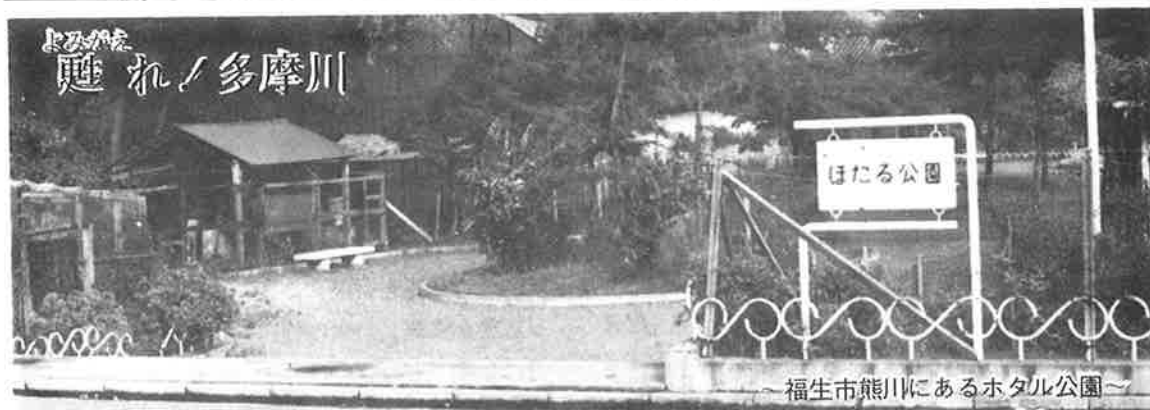
うした諸々の原因による天然アユの減少を、少しでもくい止めようとするため、人工的に養殖したアユを放流してみる事になった。大正2年の夏、当時東京帝国大学教授石川千代松博士が、琵琶湖産の稚アユ300匹を青梅万年橋付近に放流した。その頃は、湖産のアユは大きく育たないというのが定説になっていたが、実験の結果、天然のアユ同様に大きくなることが実証され、以後、多摩川はもちろん、全国へアユの人工放流が広まっていく事になる。

今では、アユ釣りの名所では、ほとんど人工放流を行なっているが、日本で始めてその実験に成功したのが、多摩川上流の青梅であった事を知っている人はあまりいない。青梅市を流れる多摩川に柳瀬橋がある。その近くの市民に親しまれている水の公園、大柳河原に「若鮎の碑」が建っている。この碑は、石川博士のアユ放流実験を記念して、漁業関係者が建てたもので、碑と言うより、むしろ彫像と言うべきであろう。多摩川の清流を背景に若い女性の裸身が、まるで若アユが身をひるがえして泳ぐような姿で横たわっている。昭和48年、青梅在住の彫刻家、松野伍秀氏の作による。

この碑は、多摩川と人々の歴史を物語る貴重な記念碑である。

青梅駅から歩いて約20分、近くには青梅市郷土館もあり、これから、アユ釣りやピクニックに出かける機会があったらぜひ寄ってみたい所である。このあたりは、まだきれいな流れと川原があり、多くの人が川遊びを楽しんでいる。





ホタル復活

福生市熊川の奥多摩街道沿いのハケ下に小さな公園がある。昭和48年にできたこの公園は、「ホタル公園」と呼ばれている。毎年、六月の中旬には、この公園でホタル祭りが催され、遠く横浜や埼玉から大勢の人が、ホタルを見に来るのだそうである。公園の一隅に、ハケの湧水を引き込んだ小さな水路があり、それを被うように大きな網の部屋が作ってある。地元の有志が福生にホタルを復活させようと作った、ホタル飼育場である。すでに奥多摩に近いこの地でも、ほとんど自然発生するホタルは見られなくなったため、こうして、人工的にホタルを復活させようと、毎日、ホタル保存会の人達が、幼虫の飼育に気を配っているのである。

夏の風物誌であるホタルが、私達のまわりから姿を消してから久しい。都区内ではもう全く自然発生はしなくなったし、多摩川区でも、昭和30年以降、急速に姿を消している。その主な原因は、まず、農業による水の汚染、それに加えて都市化による水路や水田の消失があげられる。日本にいるホタルの種類は32種であるが、そのうち、私達に最も親まれていたのは、ゲンジボタルとヘイケボタルである。この2種はホタルの仲間でも、その幼虫時代を水中で過す。そして、ゲンジボタルはカワニナを、ヘイケボタルは、モノアラガイやサカマキガイなどの淡水の貝類を食べて成長する。ところが、水路の消失や水の汚染はこの貝類の生息場所をなくしてしまったし、たとえ、こうした貝類がいたとしても、ホタルの幼虫は水質の変化

に極めて弱い。特にゲンジボタルは、水温が25℃以下の流れのある場所でないとう育成しない微妙な生き物である。私達の回りには、そうした条件をそろえた川や水路はほとんど見当らなくなって、毎年毎年、自然に世代を交代していくことができなくなった。

多摩川流域の市町村では、今、ホタルを復活させる為、その人工飼育に力を入れている。世田谷区、調布市、府中市、町田市、青梅市、奥多摩町などがそれである。公園の一隅に水路を設けたり、人工の水槽の中で、一匹でも多くの成虫が淡い光を放ちながら飛び出す姿を見守っているのである。市民の中にも、ホタルを復活させようとする個人や団体は数多い。冒頭の福生の研究会もその一例である。夏の夜空を乱舞する一匹のホタルを、人工的に発生させる事は容易な事ではない。もう20年近くも人工飼育を続けている多摩動物公園でも100匹の幼虫から20~30匹を成虫にするのがやっとだと言う。本来自然界でも、その程度の確率なのかも知れないが、かつて、いたる所で見られたホタルが小川の小さな自然の中から飛び出していたのだとすれば、1本の小川の重要さは計り知れないものがある。ホタルが人の手を借りないで世代を交代していくためには、自然の小川を復活させる事と等しい。そして、多摩川を甦えらせるには、こうした支川の小川の復活が不可欠なのである。ホタルの復活が小川の復活につながれば、今のホタルブームも大きな意味を持つはずである。

「多摩川と私」

たまがわ・こども文化の会

代表 石井作平

(童話作家)

多摩川を見ながら育ってきた人達は、私ばかりではなく何十万人と数えきれないほどいます。その人達はだれ一人として、多摩川が時代の移り変りのため日日に変貌してきた姿を見て、なげき悲しまない人はいないでしょう。ここ二十年間の移り変りの激しさはまたかくべつです。一つ一つ取り上げて申すまでもありませんが、自分が育ちはぐくまれてきた故郷があまりにも変り果てて、この先一体どうなることかと考えただけでぞっとしてきます。

宅地と道路ばかりの砂漠時代となり、そのうちに多摩川も暗渠にされ、その上を自動車が我物顔で走る道路になってしまうかも知れません。自然よりも人間本位の時代だからです。ここらでもう見なおしてもよいのではないかと思うのですがいっこうになおりません。その証拠には、自動車優先の橋が次から次に出来て行くことです。

私は、今ここで多摩川の自然を守らねば守る時がないと思い、私達多摩川周辺のこどもと文化人を結集して、「たまがわ・こども文化の会」を結成し、多摩川の自然と文化を守る運動を始めました。発足以来早や二年目を迎え、「こども・たまがわ」という雑誌を発行し、多摩川周辺の自然と文化の大切さを説き、そして守ることの運動を徴力ながら行ってきました。

次の時代を荷負うこども達が、自然の大切さを

知らずして、どうしてこの市民唯一の財産である多摩川の自然を保護できましょう。現代の大人達が自然を破壊し、次の時代のこども達に自然を大切にしろ、というのはちょっと虫のいい話でしょうが、しかしこのような運動がなかったら、現代の大人達が犯した自然破壊をさらに上回った破壊を平気で行なうこととなりましょう。

多摩川の自然を大切にしようという運動は色々な団体が行ないはじめました。誠に結構なことだと思います。各団体とも地路な活動を続けていますが、この運動こそが本当に実った時こそ、自然を私達の手に取りもどした時だと思います。

私自身多摩川に感心を持ち始めてから、かれこれ三十年。その間「多摩川の昔話」という単行本を出版し、さらに昔話を探し求め二冊目の本も出版できるくらいの量になりました。いつか世に出したいと思っておりますが、それと同時に雑誌「こども・たまがわ」は、こどもらの良い伴侶となるよう日夜念願いたしております。

多摩川という大自然にのめり込みそうになっている自分をふり返り、このような人間も一人ぐらいいてもいいではないかと思うようになり、また私ばかりではなく、私と同じように多摩川の自然にのめりこみそうな方々も沢山いらっしやることを知り、まだまだ多摩川は人に愛される川であることを実感いたしました。

〈編集室だより〉

多摩川は、今、新緑のさかりで、土、日曜ともなると多くの人が遊びに来ています。釣りも6月1日からアユ漁が解禁になって、川原は多くの釣り人で賑っています。これから、夏に向け、子供達も休みに入ると水遊びや自然観察、サイクリングに出かけていく事でしょう。どうか、ゴミや他

人の迷惑にならないよう、川の自然を大切にしていきたいものです。編集室も、多摩川'79の発行が終了のもつかのま、すぐ多摩川'80の編集にかかります。この財団だよりも、次は9月の発行になりますが、夏の間、多摩川で遊んだ事や気づいた事がありましたら、おたよりを下さい。

《多摩川およびその流域の環境問題に関する 「調査・試験研究」募集について》

昭和52年度から、地域に密着した一般の方々の研究にも当財団は助成をしてきました。昭和52年度、53年度の応募件数は14件で、次の12件が選考されました。

〈研究課題〉

- ① 多摩川中流域におけるベントスの周年変化
- ② 多摩川水系の水質について
- ③ 多摩川流域でのトウキョウサンショウウオの分布とその生態
- ④ 多摩川の水質汚濁
- ⑤ 多摩川河川敷の帰化率
- ⑥ 水質調査と環境教育
- ⑦ 多摩川流域平野の地理学的研究
—地形分類と渡河点との関連について—
- ⑧ 多摩川に流入する河川、浅川の水質調査
- ⑨ 児童、生徒、地域住民による多摩川流域の状態と水質汚濁の調査
- ⑩ 多摩川沿いの多摩丘陵東縁部の地下水の性質
- ⑪ 奥多摩水系（多摩川、秋川、平井川）の水質調査
- ⑫ 生物(ウキクサ、アオウキクサ)を指標とした多摩川の水質と環境の一考察

〈代表研究者〉

小林 貞
(私立カリタス女子高校教諭)

浜谷 光昭
(神奈川県立向の岡工業高校教諭)

金井 郁夫
(八王子市立元八王子中学校教諭)

宮崎 一郎
(法政大学第2高校教諭)

田中 勉
(神奈川県立川崎北高校教諭)

前田 穂
(都立教育研究所化学研究室指導主事)

内田 和子
(都立福生高校教諭)

舛田 辰郎
(都立日野高校教諭)

尾島 俊夫
(羽村町公民館職員)

青柳 隆二
(川崎市立宮崎中学校教諭)

西野 延男
(五日市町立増戸中学校教諭)

杉山 和子
(川崎市立稲田中学校教諭)

本年度（昭和54年度）も、募集しております。

高等学校、中学校、小学校の先生方が、グループを組んで研究するとか、生徒、児童とともに研究をする形の外に一般の方々（環境問題研究家、主婦等）がグループを組んで研究することも歓迎いたします。

研究課題は、自然科学関係は勿論、人文科学関係（例えば歴史、文化）でも結構です。

希望者は、下記財団事務局へ連絡され所定の申請書をご提出下さい。

締切日：昭和54年7月10日

連絡先：財団法人とうきゅう環境浄化財団

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号

渋谷地下鉄ビル内 電話 (03)400-9142

財団の事業紹介

〈多摩川'79(総集編・資料編)〉

多摩川'79(総集篇、資料篇)が完成しました。
“いま、川を考える”というテーマです。

骨子は、多摩川環境問題を研究中の四人の編集委員に、“いま、川を考える”の起点となる、環境論、調査解析、或は環境浄化の提言を述べてもらいました。

内容は、最初に「都市の河川座標軸」(東京農工大学農学部造園学科進士五十八講師著)は、東京圏に住む人の心の中から多摩川を見る時、環境の安定化と精神の安定化をもった東京圏の人々の座標軸として機能しなければならないといった多摩川環境論を展開しています。

次に「都市河川と雨水資源」(科学ジャーナリスト加藤迪著)、著者は、自宅に雨水の貯水槽を設けて、便所の排水、庭の散水等生活水の一部に利用をしている(実験中)、雑排水の中水道利用でなく、雨水利用の中水道の提言である。都市化によって失ったものを、自らの努力によって取りもどしてゆくのは、都市に住む人々の責任ではないかと結んでいます。

「多摩川の遊空間」(青山学院大学経営学部人文

〈多摩川河川敷現存植生図〉

多摩川流域自然環境調査(昭50~52年)の一環として調査した「多摩川河川敷現存植生図」(1/5000)の印刷が完成しました。

この植生図は、青梅市万年橋から河口までを44区分の凡例でB全版4枚にカラー印刷したものです。

日本の一級河川の中でも、これほど詳細な河川敷内の植生図を作った例はなく、世界でも珍しい、

地理学科徳久球雄教授著)は、多摩川の上・中・下流域の遊空間を解析し、東京、川崎の住民にとって、精神生活の拠り所の一つである心のふるさととしての遊空間の社会的要請はますます増大して行くであろうと述べています。

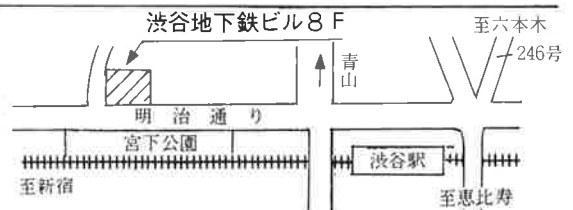
「多摩川の自然」は、50年度から3ヶ年をかけて行った多摩川流域自然環境調査報告書の内容を一般の方々がある程度の知識があれば理解できるようにリライトしたもので、魚類、底生生物、水質、植物、野鳥、小動物の実態調査を通して紹介しています。

最後に「多摩川流域の環境診断」(財団法人とうきゅう環境浄化財団、涌井雅之選考委員著)、著者はリモートセンシング手法により、多摩川の環境情報を把握するとともに、流域の実査を、ひんぱんに行い、河川を都市における自然地の廻廊として位置づけた上で、体系的な土地利用を主張しています。

その他、今年も巻末には、1978年の川のでき事を全国と多摩川に分け掲載しました。

貴重な資料です。周知のように、河川敷内の植生は、ひとつの洪水で大きく変わっていくものですが、ある時点の記録をこのように残しておく、将来どう変化したかを正確につかむことができます。この植生図は印刷部数が少ないため、参考になさりたい方は、財団事務局にお問い合わせ下さい。

- 発行日 昭和54年6月11日
- 編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団
〒150 渋谷区渋谷1-16-14
(渋谷地下鉄ビル内)
TEL (03)400-9142



*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1
TEL (0488)31-8125